



Glocal

県費奨学生配置センター機関紙 “グローバル”

Think globally, act locally.

August
2014

Vol.

1

Glocal (グローバル) : 地域貢献を果たしながら、同時により広く社会・世界に成果を還元していく姿勢を端的に表現した造語です。

特集

師弟対談

県費奨学生の研修医 渡辺氏と奈良県立五條病院 院長 松本氏に聞く

県費奨学生制度の利用によって広がる

へき地医療の未来

2 創刊の挨拶

3 県費奨学生配置センターより

4 特集「師弟対談」

6 ようこそ県立五條病院へ／ふるさと自慢

7 医療の風 ― 県費奨学生配置センター開設までを振り返って ―

8 News & Information



県費奨学生の皆さんへ

奈良県知事

荒井 正吾



少子高齢化が進行し、疾病構造が変化する中、県民が健やかに暮らせるよう、誰もが安心して医療を受けることができる環境を整備することが必要です。

奈良県では、奈良県総合医療センターや南和地域での新救急病院の整備、奈良県立医科大学附属病院の拡充といった医療提供体制の充実に取り組んでいるところですが、その中でも医師の確保が重要な課題となっています。

この状況をふまえ、県では医師不足を解消することを目的に医学生を対象とした奨学金制度を設けました。

そして、この制度を利用された皆さんは、将来、奈良県の地域医療の中枢を担っていただく重要な存在であると考えています。

また、奈良県と奈良県立医科大学は、皆さんのキャリア形成を継続的に支援していくため、平成25年10月に「県費奨学

生配置センター」を設置しました。

同センターでは、奨学生の皆さんとの面談等を通じて、キャリア形成に関する支援や配置先についての調整等を行っています。このたび、奨学生間の豊かなコミュニケーション形成のためのツールとして、機関誌『Glocal』を発刊することになりました。

機関誌『Glocal』を通じて、奨学生の皆さんの縦・横のつながりをより強いものにしていただき、さらに県内の医療関係者との確かなつながりへと広げていただければと願っています。

奨学生の皆さんには、働きがいと地域への愛着を持った、奈良県の医療を支える担い手として、今後一層ご精励いただくことを期待しています。

誰もが安心して質の高い医療を受けられる、そんな奈良県を一緒に創っていきましょう。

奈良県立医科大学 学長 兼
県費奨学生配置センター長

細井 裕司



4月より、初代センター長であった吉岡学長の後を受け、本センター長を担当することになりました。

奈良県立医科大学は、県内唯一の医療機関として、また学際的・国際的な独創的・先端的研究機関、県内医療の中核的な病院として重要な役割を担っています。その本学に平成25年10月、県費奨学生配置センターを奈良県地域医療支援センターのキャリア支援部門として設置しました。

奈良県と本学は、医療の地域偏在、診療科偏在を解消するため、不足する診療科等の医師を確保するとともに、奈良県に愛着を持ち、奈良県内で活躍する医師をひとりでも多く養成することを目指しています。

当センターでは、奈良県の修学研修資金制度を利用し、将来地域医療の中核を担う医師を目指し学んでいる学生や研修

医のキャリア支援を行っています。この春には緊急医師確保枠では第1回の卒業生を送り出したところです。今後は、臨床研修病院での温かくも厳しいご指導の下、志高く地域貢献に寄与することを願っています。

このたび創刊することとなりました県費奨学生配置センター機関誌『Glocal』は、こうした県費奨学生、臨床研修病院をはじめとする病院関係者の方々に、さまざまな情報を提供していけるものと期待しております。

今後も、奈良県の地域医療を担う医師の育成と支援に邁進してまいりますので、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、医療の発展のためがんばっておられる皆様のご活躍を祈念いたします。



県費奨学生配置 センターより



県費奨学生配置センターでは、県費奨学生ならびに県費奨学生医師の皆さんのキャリア形成支援を目的とし、キャリア形成や要望を踏まえた上で、医療機関、奈良県立医科大学の講座・センターとの調整を行いながら配置案の策定をし、皆さんのキャリアプログラムをバックアップします。

そのほかにも医師確保修学資金制度の普及や交流活動の企画も行います。

昨年度末には、教育開発センター（藤本眞一教授主催で「緊急医師確保特別入学試験枠学生・第一期卒業生を囲む会」が開催され、学長（吉岡 章）、奈良県医療政策部長（高城 亮）、地域医療学講座教授（松村 雅彦）からの挨拶に続き、在校生代表、5人の卒業生からの挨拶、最後に在校生から卒業生に花束の贈呈と、つつましくも温かいプチ卒業式が行われました。

その後は卒業生と在校生の交流会、そこにはこの春入学予定の皆さんも参加して、将来の奈良県の医療を担っていく若い息吹が会場を包んでいました。初めての交流会に「こんなに仲間がいるんだと心強く感じました。」という声も聞かれ、こうした集いが皆さん一人一人の心の支えになることをあらためて感じました。

県費奨学生の声

The Voice of Student

「奈良県で目指す医師像」

医学科1年 花川 傑（大阪府出身）

私は将来、奈良県のへき地で総合臨床医として働くことを目指しています。そんな中でも私は、病気ではなく患者を診られる医師になりたいです。そして、本当に患者を診るためには、医師と患者との間に確固とした信頼関係が成り立っていないといけないと思いますの

で、その信頼関係を築くために、患者本人だけではなく、患者の家族ともしっかりコミュニケーションを取っていきたいとも思っています。まだ漠然とした思いですが、これからの学校生活の中で、将来に役立つことを少しずつでも実践していきたいです。

医学科1年 畠 健悟（大阪府出身）

私の理想としている医師像は「患者さんの立場に立って考えることができる医師であること」です。地域医療に従事する医師は患者さんの生活と向き合う機会が多いことでしょう。だからこそ「ただ治せばいい」のではなく、「どのように治すのか」が重要であると考えます。患者さんにはそれぞれの生活があり、それゆえ人によってそれぞれ治療に対するニーズがあります。身近な病気を扱うからこそ、そのニーズ1つ1つに目を向け、治療方針を共に考え、患者さんのQOL（Quality Of Life）向上に尽力するのが地域医療に従事する医師の勤めだと考えています。

「近況報告と後輩へのメッセージ」

研修医 山中 彰一郎（大阪府出身）

はじめまして。現在、奈良県立医科大学附属病院で1年目臨床研修医をさせていただいております、山中彰一郎と申します。学生時代6年間過ごした学び舎で、学生実習からお世話になった先生方に御指導賜るということで、学生気分が抜けきらないのではないかと密かに危惧していました。しかし、そんなことは杞憂でした。学生時代に飽きるほど見たと思っていた景色は、立場が変わると全く違う表情を見せ、研修2ヶ月を過ぎた今も新鮮な驚きで満ちた毎日を送っております。

私が大学附属病院を選んだ理由の一つに学生の存在があります。学生が病院での研修の質を評価するのに最も指標になるのが、学年の近い我々の振る舞いです。そのことが意識にあるためか、病棟で実習生を見かけると禪を締め直す思いに駆られ、そのことが研修に適度の緊張感を与えてくれると私は考えております。

後輩が研修を希望するような環境を作るため、私自身もまだまだ精進せねばなりません。今後とも、御指導、御鞭撻の程、宜しくお願い致します。

研修医 殿村 玲（奈良県出身）

本年度より奈良県立医科大学附属病院で研修医として勤務させていただいております。研修が始まって3ヶ月が経ち、良い意味で慣れてきたと感じながらも、それ以上に日々新たなことを経験でき、そんな毎日が本当に充実していると感じております。

この3ヶ月を振り返って特に思い出されるのは、不安でしかなかった最初の2週間のことです。オーダーの方法や薬品名のほか、もはや何をすればよいかわからず、ただ指導医の先生についていくことしかできませんでした。そういった中、先輩の先生方の存在は本当に大きいものです。研修医2年目の先生には、不安な気持ちに対し共感していただき、その上で丁寧にわかりやすいご指導をいただいております。

また医局の先生方からは、より多くの知識と経験に基づいた高度な指導とともに、自分の目標とすべき医師像を日々示してくださっていると感じております。

まだまだ始まったばかりの研修生活、これからも精一杯努力して参ります。今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

特集 師弟対談

県費奨学生制度の 利用によって広がる へき地医療の未来

奈良県立五條病院 院長 松本 昌美 氏
Matsumoto Masami

研修医 渡辺 淳 氏
Watanabe Atsushi

奈良県の南和地域における医師が不足している現状について教えてください。

松本昌美院長（以下、院長） 南和地域は奈良県の面積の約3分の2を有する地域です。一方、奈良県の人口約140万人のうち、南和だけの人口が約8万人の医療圏であり、非常に高齢化と過疎化が進んでいる地域でもあります。

その中で県立五條病院は地域基幹病院として、これまで医師確保に関しては奈良県立医科大学の各教室からの派遣が主でしたし、また教育・研修機関として自治医大や奈良県立医科大学から学生や研修医を受け入れてきました。

平成16年4月から厚生労働省による新臨床研修医制度が始まりました。それに伴い、大学の医師の引き上げが起こりました。医師不足が進んでいったのはその後になります。

南和地域には、当病院以外に大淀町立大淀病院、吉野町国民健康保険吉野病院という同規模の急性期病院が2つあります。その3病院の医師数を合わせても、平成16年が72名、平成20年が54名、平成24年には43名と数が急に減少していきました。少ない医師数では医療機能がさらに低下していきましますし、受け入れられる救急患者さんの数も限られてきます。

また、この地域には広大なへき地があります。へき地には9カ所の公立診療所があり、五條病院へき地医療支援機構が

らはそのうちの7カ所に自治医大卒の医師を派遣していましたが、それらの診療所への医師派遣も医師不足により十分に対応できなくなりました。

そのような厳しい医療事情を抱えながらも地域医療を守るべく懸命に努力していました。

県費奨学生医療制度によってメリットはありましたか？

院長 県費奨学生を受け入れるメリットは、何といってもマンパワーの確保です。これは医師不足の中で地域医療を守っている現場としては有り難いことです。

もともとへき地医療や地域医療に興味がある人がこの制度に申し込まれます。病院としては医師確保のためにこれまでいろいろとアピールしてきましたが、このシステムのおかげで病院機能とマッチした人が見つかるようになりました。

県費奨学生制度を利用した研修医を受け入れるようになり、指導医と研修医がペアとなって、初診や時間外の患者、救急患者などの対応がしやすくなりました。研修医は常に指導医にコンサルトしながら患者対応するとか、あるいは当直では、研修医と指導医の副直制度をとることで、平日夜間の忙しい時間帯や休日二人体制の診療が可能になりました。その結果、昨年では救急搬送などの受け入れ件数を大幅に増やすことができました。



奈良県立五條病院 院長
松本 昌美 氏

昭和31年生まれ。昭和57年奈良県立医科大学卒業。平成7年同大学にて医学博士号取得。平成9年より奈良県立五條病院に勤務。中央臨床検査部部長、内科部長、副院長を経て平成20年より現職。専門は消化器内科。NPO法人PEGドクターズネットワーク理事、関西PEG・栄養研究会世話人、PEG・在宅医療研究会世話人など幅広く専門性の高い医療活動を行う。

渡辺 淳 研修医（以下、研修医） 私は奈良

県立医科大学の初期研修中に、県費奨学生制度にはへき地で研修できるコースがあることを知りました。コースでいえばへき地の診療所などに従事できる人材を育てる「地域型総合医コース」になります。

私はもともと山登りが趣味で、吉野地域にはよく訪れてきました。山々に囲まれたこの地域全体が好きで興味があり、ずっとこの地域の人と医療を通じてふれあっていきたいという思いから、この制度に申し込みました。

実際に制度を利用したことで、初期研修のとき収入が増えましたし、吉野地域の医療従事者の方とも知り合う機会に恵まれ、制度を利用して良かったと思っています。

県費奨学生の研修医が来たことに対する医療スタッフの感想はいかがですか？

院長 指導医は研修医をしっかりと教育、指導をしなければなりません。一見それは仕事の負担になるのではないかと思われるかもしれませんが、指導医にしてみると後輩を教えるということは、苦痛ではなくてむしろ楽しいことであつたりしま

す。医師というのは、若い後輩たちを教えることでモチベーションも上がり、元気になるのですよ。メディカルスタッフたちも若い医師が指導医と一緒にいる姿を見ることでさらに元気になると思います。

患者さんの中には、研修医の診察が丁寧すぎて、時間がかかることもあり、かえって病状を心配するかもしれませんが、指導医が説明している様子をみてもらうことで「指導のできる、教育のできる病院」として、患者さんには安心して診療を任せていただけたらと思います。

研修医としての仕事内容を教えてください。

研修医 主としては指導医とともに総合内科の外来診療を担当しています。他には時間外の救急対応や当直もあり、大塔診療所には週2回診療に行っています。

内科以外には皮膚科や整形外科などでコモンディーズ（頻度の高い日常によくある疾患）なども経験できます。へき地での医療というと、その地域の診療所だけしかないので、いろいろな疾患を抱えた人が受診されます。そのために「まずは診てみましょう。」ということのできる「地域型総合医」のためのプログラムを組んでいただいています。

県費奨学生義務履行2年目。実際に研修医として働いた感想はいかがですか？

研修医 へき地での診療は大学病院では

学べないことばかりですので、現場で患者さんを診ることでへき地や地域医療の勉強になります。現場には必ず指導医がいて「これは自分の力量を超えているな」と思えば相談もできます。勉強しながらの診療ですが、現場に即した勉強ができますし、一人ではないという安心感がありますね。一人でも多く診る目が増えることで見落としが減りますので患者さんも安心だと思います。

また、私は精神疾患などに興味があり、週に1度奈良県立医科大学の精神科で研修しています。専門性を持ったゼネラリストになることは、地域型総合医としても必要なことで、特化した医療の専門性も深めていけるような枠があり、研修の環境面ではサポート体制が整っていますので大変有り難く思っています。

医師として今後どのようなキャリアにつながっていきますか？

院長 うちの病院の研修医については、いろいろに分かれると思います。まずはへき地の診療所に携わることでできる地域型総合医、あるいは開業医や、在宅医療など地域に根付いた診療をする総合医です。

また、病院型の総合医を目指せます。その場合、救急診療に特化した総合医、あるいは総合的な判断や、診断能力が高く、治療もできる総合内科医、総合診療医に繋がります。



研修医
渡辺 淳 氏

昭和44年生まれ。高野山大学文学部仏教学科を卒業後、奈良県立医科大学へ。卒業後初期研修として大学で1年半、吉野病院で半年の計2年間を終えた4月に「地域型総合医コース」を選択。五條病院へ研修医として就業する。現在は卒後4年目、県費奨学生義務履行2年目、医員として勤務中。

もちろん、専門医も目指せます。現在勤務している渡辺さんは県費奨学生制度を「地域総合医コース」で申し込まれましたが、専門医がいる診療科目に関しては今後、「特定診療科一貫コース」の受け入れも可能です。その場合であってもゼネラリストとして広く深く医療に携われる人材に育てたいですね。

これから制度を利用しようとする人へのメッセージをお願いします。

研修医 常日頃から松本院長は「明るく、楽しく、それでいて仕事のレベルを落とさないように」とおっしゃいます。病院の皆さんにしっかりとバックアップしていただけるので、若い人は安心して、思いっきりこの世界に飛び込んで来てください。

院長 仕事を楽しく、やりがいをもって働くためには、きちつと指導できる体制が重要だと思っていますので、教育や指導面でしっかりとサポートしますよ。医療スタッフたちと仲良く、明るく、楽しく一緒に働けたらいいですね。是非いらしてください！

ようこそ県立五條病院へ

奈良県五條市にある県立五條病院。昭和 47 年 4 月に山間へき地を多く抱える南和地域の中核病院として開設されました。救急医療、災害医療、そしてへき地医療の拠点病院として質の高い地域医療を提供しています。また、五條、吉野、大淀の公立 3 病院を統合・再編し、新しい救急病院が平成 28 年 7 月にオープンします。



地域医療再生のためにできること

五條病院は南和地域の中核病院として日々多くの住民を医療面で支えています。同病院の大きな特長として、「消化器病センター」が設置されていることが挙げられます。消化器内科、消化器外科が連携・一体化することによって、専門性の高い診断、治療の体制を充実させ、五條市を中心に南和二次医療圏および近隣の中和地域や和歌山県の一部地域における消化器疾患診療を担っています。

また、同病院で対応できない場合は、中和地域にある奈良県立医科大学附属病院に搬送されることになりますが、医療効率の面においても、できる限り南和で起きたことは南和で受け入れられるように救急体制の強化に取り組んでいます。



消化器病センター

たとえ医師不足、限られた医療資源の中にあっても総合内科体制や副直制度を構築して、当直医の負担を減らすなどの工夫もしています。その結果、昨年度より病院全体の救急車搬送患者の受入数が 3 割増加するなど実績も上がり、同病院の取り組みは注目を集めています。

また同病院で研修を受ける場合、へき地医療や在宅医療など、大学病院では研修できないような地域性を活かしたプログラムがあります。たとえばへき地診療所では医療設備としてレントゲン、心電図の他にエコー、内視鏡などが設置されているため、それらの医療機器によって適切な診療ができるようにバックアップ体制が組まれており、地域のサブスペシャリティ（専門医資格取得）としての内視鏡研修なども行われています。



県立五條病院

住所 奈良県五條市野原西 5 丁目 2-59
TEL 0747-22-1112 FAX 0747-25-2860 URL <http://www.gojo-h.jp>
病院種別：急性期型病院 病床数：199 床 診療科目：内科、神経内科、小児科、外科、整形外科、脳神経外科、皮膚科、泌尿器科、婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、放射線科、麻酔科（13 科目）

ふるさと自慢 01 柿 かき

五條市は吉野川流域に位置し、西は金剛・葛城山、南は吉野連山に囲まれ、豊かな自然に恵まれた地域です。古来より吉野山地への入口として、また大和国と紀伊国を結ぶ交通の要衝として発展してきました。江戸期・明治期などの建物が現存する旧紀州街道沿いは通称「新町通り」と呼ばれ、古い町並が残る市内の主要観光スポットになっています。また、金剛・葛城山には毎年多くの登山客が訪れます。そんな同市のふるさと自慢は「柿」。柿の生産量は市単位では日本一といわれています。柿は品種によって「甘柿」と

「渋柿」に分かれます。同市で作られている代表的な品種には「富有（ふゆう）」（甘柿）「平核無（ひらたねなし）」（渋柿）「刀根早生（とねわせ）」（渋柿）があり、その中でも「富有」がもっとも生産量の多い品種です。

柿にはビタミン C やカロチンが豊富に含まれ、主な効用は風邪予防、二日酔い予防、美肌効果など。果肉だけでなく、干し柿、柿の葉の利用など、いろいろな用途がある万能な美味しい果物です。



医療の風

県費奨学生配置センター開設までを振り返って

地域医療学講座教授 松村雅彦

平成22年当時、奈良県は、平成18年と19年に「奈良妊婦たらいまわし事件」との表現でマスコミに批判された救急医療体制の不備、平成16年から始まった新臨床研修体制からくる医師不足と言った問題を抱えていました。そんな中、地域医療に関する教育・研究を通じて地域医療の充実を図り、医師の適正配置に役立つことを目的として、地域医療学講座が平成22年10月に開設されました。その主な役割は最適な地域医療体制の「設計図」を創る

ことで、まず脳卒中中の救急診療体制の研究を手がけましたが、徐々に医師不足や医師の偏在を解消する起爆剤となる県費奨学生のキャリアパスを構築することが重要な任務となってきました。平成23年から試行錯誤を重ね、平成24年12月にはキャリアパス策定の要点、キャリアパス概要およびキャリアパス例がほぼ完成しました。その後はキャリアパスガイドブックを作成し県費奨学生の方々に説明するとともに、関連医局とも調整を図りながら

最適な地域医療体制の「設計図」を創る

- 県内における「救急の重要5疾患※」の発生状況ならびに診療実態を把握し、医療の過不足につき医療統計学を用いて客観的に評価する
- 地域医療の現状を踏まえ、最適な救急医療体制ならびにへき地医療体制を構築するための医師配置について研究する
- 病院間の連携や役割分担につき研究する
- 県費奨学生等地域医療を担う医師に対し、キャリアパスを作成するとともに支援する
- 地域医療の概念、地域医療の実施・マネジメント等に関する教育を行う

※脳卒中、急性冠症候群・心筋梗塞、重症外傷、急性腹症、周産期疾患

更新しています。この間、23年度からは医師確保研修学研修資金貸与者の義務履行が開始され、配置案を作成してきました。配置案の作成は、県の意向、医局および本人の意見を聴き、調整を行っています。

このようなことで結構頑張ってきたつもりですが、振り返れば、地域医療学講座でできたことは限られていました。なかでも、県費奨学生のキャリア形成支援や県費奨学生との交流、県費奨学生同士の交流を推し進めようとしてきましたが、なかなか思うようにはいきませんでした。

今後は、県費奨学生配置センターにおいて、キャリア支援、交流が推し進められるよう、副センター長として頑張りますので、よろしく願います。

松村 雅彦氏

Matsumura Masahiko

地域医療学講座 教授

県立医大医師派遣センター 副センター長

県費奨学生配置センター 副センター長

研究領域：

地域医療学、総合医療学、臨床栄養学、消化器病学、消化器内視鏡学

News & Information

県費奨学生配置センターの看板は前学長(吉岡 章氏)の直筆です！



平成 26 年 3 月 26 日午前、学長室にて

連絡先の変更届

配置の相談をはじめ、キャリア支援、情報提供のためにメールや電話で連絡を取っています。メールアドレスや電話番号の変更を届けられていない場合、大切な情報がお知らせできません。変更された場合は、必ず当センターにご連絡ください。特に、義務開始年度が平成 27 年、28 年に該当する方で今までに当センターとの連絡歴がない方は一度ご連絡ください。

キャリア面談

平成 27 年度から義務履行する皆さんの配置先を決定するための面談を前期と後期に行います。初めての配置になる方は前期と後期の 2 回、少なくとも後期の面談はさせていただきます。不明なこと、不安なこと、ここで解決の糸口をつかみましょう！

前期：6 月～7 月 ※終了しました。

「どの科を選択しようか、まだ決まらない…」

「こんなことを研修したい！どこならできる？」

後期：11 月～12 月

「こんなところで研修したい！それって可能？」

「この科でこんな医療をしたい！義務との両立は？」

これら定期の他、ご相談の際はセンターにお問い合わせください。



配置決定までのスケジュール

11 月～12 月 配置予定者の意向確認

12 月～1 月 専門診療科医局、公立公的病院との調整

2 月上旬 県費奨学生配置センター運営委員会で配置案の策定

2 月中旬 県(知事)への配置案の提示

3 月上旬 配置先病院および配置予定者に連絡

配置先医療機関管理者の皆さまへ 配置先医療機関訪問

9 月～10 月に配置先医療機関の医療提供状況等を聞かせていただきながら、次年度の義務履行者の配置を検討する参考資料にします。ご協力をお願いします。



編集後記

3 ページに登場の 1 年生 2 名の撮影は当センターで、プロのカメラマンさんにたくさんの写真を撮っていただきました。和やかに楽しい撮影現場でした。お忙しい中ありがとうございました。(Y.Y)

その後、南下すること 1 時間、県立五條病院での取材が始まり、職員の方のご協力でとてもいい画が撮れました。「ふるさと自慢は？」と尋ねると困られていましたが、こうした皆さんの連帯感も自慢のひとつかもしれません。(T.M)



公立大学法人奈良県立医科大学 県費奨学生配置センター

〒634-8521 奈良県橿原市四条町 840

TEL : 0744-23-9111 FAX : 0744-23-9966

mail : kenpi@naramed-u.ac.jp

